

マタイ 8:1-4 「イエスによる癒し」

「イエスが山を下りられると、大勢の群集が従った。すると、一人の重い皮膚病を患っている人がイエスに近寄り、ひれ伏して、『主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります』と言った。イエスが手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言われると、たちまち、重い皮膚病は清くなった。イエスはその人に言われた。『だれにも話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めた供え物を献げて、人々に証明しなさい』」

主イエスキリストは小高い丘の上で説教されました。それが「山上の垂訓」と言われるものでありまして、マタイによる福音書の第 5 章から 7 章に収められております。

いまや、わたしたちの主イエスキリストは、「山上の垂訓」すなわち、山の上での説教を終えられて、山を下りて来られました。「山上の垂訓」の世界。その、天のように高く崇高な教え。神によってきよめられた聖なる者たちの理想の生活。そういう「山上の垂訓」の世界から、主イエスは下りて来られまして、いまや、地上でもがき苦しむ人々の現実の生活の中へと、主イエスは入って行かれます。

地上の現実の生活の中で、待っている人々がおります。そこに、わたしたちもいて、わたしたちも待っております。地上の現実の生活の中で、わたしたちもまた、うめき苦しみつ、主イエスを待っております。

だれがイエスを待っていたのでありましょうか？ それは、わたしたちである、ということはいうまでもありません。しかし、マタイによる福音書 8:1-4 の記述におきましては、待っていた人は、重い皮膚病の人であった、ということが示されております。この待っていた重い皮膚病の人のなかに、わたしたち自身が重ね合わされております。主イエスを待ち望んでいるわたしたちが、どのような者であるのか。この地上の現実の生活における、わたしたちのうめき苦しみが、どういうものであるかということが、重ね合わされて示されております。

重い皮膚病の人は、どのような人であったのでしょうか。それは、わたしたちがどのような者であるか、ということでもあります。

重い皮膚病の人は、第一に、自分自身から切り離された人でありました。

わたしたちはだれしも、「自分はこのようになりたい」という自己実現の願望を持っております。わたしはこのような人になりたい。わたしはこうなりたいたい、そのことの中に、自分の心の状態。自分のからだの健康。自分のすがた、かたち、容貌。自分の着る衣服。自分の生活のスタイル。自分の仕事のありよう。こういうことが全部含まれております。そういう全部を含めての「わたしはこうなりたいたい」という自己実現の願望であります。

しかし、重い皮膚病が、自分のすがた、かたち、容貌を損なうときに。重い皮膚病が、自分の健康を損なうときに。重い皮膚病が、自分の心を塞ぎ、心の状態を不安定なものとするときに。わたしたちは、本来こうありたいと思っている自分の姿、あるべき自分の姿から、どんどん疎外されていくことになります。

自分は、あるべき自分になっていないという、これを「自己疎外」と申します。G. K. チェスタートンは、こう申しました。「ひとについて言われることが何であれ、この一点は明らかである。すなわち彼は、そうあつてしかるべき者になっていない、ということである」

ここに、わたしたちもいるのではないのでしょうか。ここで、わたしたちも、悲しみ、うめいているのではないのでしょうか。

わたしは、あるべき自分になっていない。この悲しみのうちに、わたしたちは主イエスを待ち望んでおります。

重い皮膚病の人は、どのような人であったでしょうか。それは、わたしたちがどのような者であるか、ということでもあります。

重い皮膚病の人は、第二に、社会から切り離された人でありました。

イエスご在世当時のパレスチナにおきましては、ユダヤ人の社会生活は、モーセの律法によって、その生活の仕方をこと細かに規定されておりました。その細かい規定のひとつに、重い皮膚病の人がいたならば、これを社会から隔離せねばならない、ということが指示されておりました。重い皮膚病の人は、ただ単に自分自身から切り離された、自己疎外された、というだけでない。社会から切り離された、社会から疎外されたのであります。

空気の乾燥がひどい中近東におきましては、人のからだの皮膚から水分がすぐに蒸発してしまいますので、皮膚がカラカラになってしまいます。そうしますと、皮膚と皮膚との接触を通じてウイルスや細菌の感染を受け易くなってしまいます。

こういう乾燥した環境の中で皮膚を守る方法としては、まず、頻繁に水浴びをする、という方法があります。水でウイルスや細菌を洗い落とすと共に、皮膚に水分が取り戻されてまいります。

そしてまた、肉をたくさん食べる、という方法があります。肉を食べることによって、たんぱく質が皮膚を丈夫にいたします。また、油が皮膚を覆うようになって、これで皮膚の保湿効果が発揮されます。

さらにまた、皮膚病の原因、皮膚病の感染源を除去してしまう、という方法があります。すなわち、重い皮膚病になった人を社会から隔離してしまうことによって、皮膚と皮膚との接触を通じた感染を防止しようというわけです。

感染予防の三つの方法としての水浴び、肉食、隔離ということについて、モーセの律法を見てみますと、そこでは、ひんばんに水浴びをするように、ということが指示されております。また、おりあるごとに牛や羊やハトなどの動物を犠牲として神様にささげて、その肉を食べるように、ということが指示されております。さらにまた、重い皮膚病になった人を社会から隔離するように、ということが指示されております。中近東の乾燥した風土の中で皮膚を守り、感染を予防するという観点で見ますならば、水浴びも肉食も隔離も、大変理にかなっている、ということが言えるであります。

しかし、社会を守るために「理にかなっている」ことがらであっても、隔離される側の立場からしてみるならば、それは不条理以外の何ものでもありません。不条理どころか、地獄の経験であります。

なぜならば、昨日まで一緒に仲良く楽しく暮らしていた家族や同僚や近所の人たちから、手のひらを返すようにして、「あなたはもうここにはいけない」「ここはあなたのいる場所ではない」「あなたの居場所はここにはない」「出て行ってくれ」「もう二度と会うことはできない」「あなたはわたしたちには必要ではない」「あなたがいること自体が迷惑だ」というふうに言われるのです。こ

これは、わたしたちの心を殺す言葉です。そしてまた「理にかなっている」ということが、恐ろしいところでもあります。理にかなっていることであればあるほど、その理によって、その理のもとで扱いを受ける側の心は、深く、いやしがたく、殺されていくのであります。

ここにわたしたちもいるのではないのでしょうか。わたしたちもまた、理にかなっているがゆえに、その理によって、深く心を殺されたことがある。そういう経験をしたことがある、あるいは、いまでも経験しているのではないのでしょうか。ここで、わたしたちも、悲しみ、うめいているのではないのでしょうか。

わたしの心は殺された。この悲しみのうちに、わたしたちは主イエスを待ち望んでおります。

重い皮膚病の人は、どのような人であったのでしょうか。それは、わたしたちがどのような者であるか、ということでもあります。

重い皮膚病の人は、第三に、神から切り離された人々でありました。

モーセの律法それ自体は、重い皮膚病の人が神から切り離された人である、というふうには扱っておりません。モーセの律法を見ましても、重い皮膚病が、神に呪われた業病である、というような表現は、どこにも出てまいりません。重い皮膚病の取り扱いについて規定しているレビ記第 13 章と 14 章は、公衆衛生の観点から病気の取り扱いを淡々と述べているだけのよう to 思われます。すなわち、重い皮膚病を、女性の出血や、男性の体液の流出などと並べて扱っております。

しかし、重い皮膚病の人は、それがなおったときには、完全に治癒したということを、人々の前で明らかに認定してもらわなければなりません。完全になおったことを人々の前で認定してもらうためには、祭司のところへ行って、定められた動物を犠牲として神にささげて、清めの儀式を受ける必要がありました。この清めの儀式には、それまで社会生活から隔離されていた人が、再び社会生活の中に戻ることを承認し、公に宣言するという意味が込められておりました。

この清めの儀式を司ったのが祭司でありましたことから、重い皮膚病は、そこに過剰な宗教的意味を込めて見られるようになりました。過剰な宗教的意味を

込めて見られた結果、重い皮膚病は、単に隔離されるべき感染症という意味を離れて、いつしか、神に見捨てられた者の病気、神の怒りを受けた者の病気、さらには、神に呪われた者の病気というふうに、誤解されて行くこととなりました。

わたしたちが、自分自身から疎外されて、今の自分は本来あるべき自分でないと感じるとき。これが自己疎外であります。わたしたちが、周りの人から拒絶されて、自分の居場所がどこにもないと感じるとき。これが社会からの疎外であります。こういう疎外感を味わうときに、わたしたちの魂は、こういう思いで責めさいなまれます。すなわち「自分はどうして、こんなふうになってしまったのだろう。何が悪かったのだろう。自分のどこがいけなかったのだろう」

そのようなときに、「それは、おまえが神に見捨てられたからだ」「おまえが神の怒りを受けたからだ」「おまえが神に呪われた者だからだ」という声が、どこからともなく聞こえてまいります。この暗黒から来るところの声を受け入れてしまったときに、わたしたちは、疎外の最終段階にやってまいります。すなわち、自分が自分から疎外されるという自己疎外。周囲から拒絶されるという社会からの疎外だけでなく、ついに、神から疎外されるという、疎外感の最終段階に入ってまいります。

ここにわたしたちもいるのではないのでしょうか。わたしたちも、自分が自分から疎外され、社会から疎外され、神から疎外されている、という経験、あるいは、そういう感覚を持っているのではないのでしょうか。

わたしは神に見捨てられたのか。この悲しみのうちに、わたしたちは主イエスを待ち望んでおります。

これがわたしたちでありまして、このような者として、わたしたちは主イエスがおいでになるのを待っております。

イエスを待ち望むこと。イエスに対する望みを抱いて、ひたすらイエスを待つこと。これが「信仰」であります。わたしたちはイエスを望み、イエスを待っております。

ところで信仰は、満足や確信や自信からは出てまいります。信仰は、成功や繁栄や祝福からは出てまいります。信仰は、ただ弱さから出てまいります。

信仰は、弱さに根ざしたものであります。

もしわたしたちが、完全な自己実現を自力で成し遂げて、自分に対する完全な満足を持っていたなら、わたしたちはイエスを待ち望んだりしないでしょう。わたしたちは誰をも待ち望まないでありましょう。たとえイエスが来られたとしても、わたしたちはただこう言うだけででしょう。「イエスよ、あなたが誰だか存じております。神の子キリストです。しかし、あなたとわたしとなんの関わりがあるでしょう。わたしを放っておいてください」

もしわたしたちが、成功と名声と地位を確立して、周囲の人々に称賛され尊敬され愛されていたなら、わたしたちはイエスを待ち望んだりしないでしょう。わたしたちは誰をも待ち望まないでありましょう。たとえイエスが来られたとしても、わたしたちはただこう言うだけでありましょう。「イエスよ、あなたが誰だか存じております。神の子キリストです。しかし、あなたとわたしとなんの関わりがあるでしょう。わたしを放っておいてください」

もしわたしたちが、自分自身の宗教的探求によって、自分の理解するかぎりにおける「神」といわれるものを手に入れて、その神をあたかも自分の手の中の道具のように便利に使うことによって、成功と確信と満足を手に入れていたなら、わたしたちはイエスを待ち望んだりしないでしょう。わたしたちは誰をも待ち望まないでありましょう。たとえイエスが来られたとしても、わたしたちはただこう言うだけでありましょう。「イエスよ、あなたが誰だか存じております。神の子キリストです。しかし、あなたとわたしとなんの関わりがあるでしょう。わたしを放っておいてください」

信仰は、イエスに対する信仰は、わたしたちの満足、わたしたちの確信、わたしたちの自信からは出てまいりません。信仰は、イエスに対する信仰は、わたしたちの成功、わたしたちの繁栄、わたしたちの祝福からは出てまいりません。信仰は、イエスに対する信仰は、ただ、わたしたちの弱さから出てまいります。信仰は、イエスに対する信仰は、ただ、わたしたちの弱さに根ざしたものであります。

あの重い皮膚病の人は、それは、ほんとうのわたしたちの姿であります。あの重い皮膚病の人は、自己から疎外され、社会から疎外され、神から疎外されていたゆえに、イエスに走り寄ったのです。イエスのみまえにひれ伏したのです。イエスに向かってこう叫んだのです。『主よ、御心ならば、わたしを清くす

ることがおできになります』 弱さの中からほとぼしり出る信仰の叫びであります。これが、祈りであります。

わたしたちは、今日、ここにおります。地上の現実の生活のただなかにおります。この地上の現実の生活の中で、もがき、苦しみ、うめいております。それゆえに、わたしたちはイエスを待ち望んでおります。そうして、イエスはわたしたちのもとへ来たりたもう。イエスは来たりたもう。それは、わたしたちがイエスを待っているゆえであります。わたしたちが、わたしたちの弱さの中でイエスを待っているゆえに、イエスは来たりたもう。

わたしたちは、弱さの中から叫びます。「主イエスよ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」 するとイエスは手を差し伸べて、わたしたちに触れ、「よろしい。清くなれ」と言われます。

たとえわたしたちが、自分自身から切り離され、自分で自分をどうすることができないとしても、イエスがわたしたちに触れてくださいます。主イエスは、わたしたちに、新しいわたしを与えてくださいます。

たとえわたしたちが、社会から切り離され、自分の居場所をみつけることができないとしても、イエスがわたしたちに触れてくださいます。主イエスご自身が、わたしたちの新しい居場所となってくださいます。

たとえわたしたちが、神から切り離され、神に見捨てられたように感じているとしても、イエスがわたしたちに触れてくださいます。主イエスキリストにおける神が、わたしたちのほんとうの神となってくださいます。主イエスキリストをとおして、わたしたちは、主イエスキリストの父である神に結ばれることができます。

主イエスは今日、わたしたちのもとにおいでくださいます。わたしたちは、どのようにイエスに叫ぶべきでありましょうか。

あの悪霊たちと同じように、こう言うのでしょうか。「イエスよ、あなたが誰だか存じております。神の子キリストです。しかし、あなたとわたしとなんの関わりがあるのでしょうか。わたしを放っておいてください」

主イエスは今日、わたしたちのもとにおいでくださいます。わたしたちは、ど

のようにイエスに叫ぶべきでありましょうか。

あの重い皮膚病の人と同じように、こう言うでしょうか。「主イエスよ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります。わたしを清くしてください」

祈りましょう。

祈り

天の父なる神さま。わたしたちは、わたしたちの弱さの中で主イエスを待ち望み、主イエスに祈ります。

主イエスよ。どうか御心ならば、わたしたちを清くしてください。聖書に「御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます」と約束されていますことを、心から感謝いたします。

わたしたちは、地上の現実の生活の中で、自分から疎外され、社会から疎外され、神から疎外されるように感じて、もがき、うめき、苦しんでおります。この弱さの中で、わたしたちは主イエスを待ち望んでおります。主イエスよ、どうかあなたが、手を伸ばしてわたしたちに触れてくださり、わたしたちを癒し、わたしたちを清め、わたしたちを新しくしてくださいますように。

いまや、主イエスが、わたしたちに、新しいわたしを与えてくださることを感謝いたします。いまや、主イエスが、わたしたちの新しい居場所となってくくださることを感謝いたします。いまや、主イエスキリストの父である神が、わたしたちのほんとうの神となってくくださることを感謝いたします。

どうかわたしたちが、イエスを待ち望み、イエスに触れられ、イエスに結ばれ、イエスに導かれつつ、イエスに向かって、今週も生きることができますように。主イエスの御名によってお祈りいたします。アーメン